

---

# 大好きだ！

佐藤ビー玉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大好きだ！

### 【Nコード】

N5871A

### 【作者名】

佐藤ビー玉

### 【あらすじ】

この世の果てまで女好き、くぬぎ・いちいち功刀幸一郎と、頭の悪い美人女子高生、東海林山都。しんこう・やまこ凸凹コンビ、悩みなんでも解決します（たぶん）！

## 第1話・目（前書き）

はじめまして、佐藤ビー玉と申します。楽しんでいただければとても嬉しく思います。

## 第1話・・・目

もう何も見せるな。

私の中に入ってくるな。

私の心を探り当てるな。

私は絶望しているんだ。

「…痛いでしょうが、山都ちゃん」

8:24 a.m.

不自然な痛みで目を覚ました功刀幸一郎は、自分の額を軽くおさえ  
てムクリと体を起こした。

目を覚ましたと云っても彼の目はまだまだとろんとしていて、焦点  
が合っていない。

二度寝しようとしてもう一度ベッドに横になったが、すぐに面倒く  
さそうな様子で

「はいはい」

と言つてベッドから離れた。

「もうすぐ8時半よあほ」

そう言つて分厚い本を片手に幸一郎を睨みつける、少し茶色みがか  
ったセミロングの女性。

東海林山都、18才。

山都が通う学校では美人と評判だが、頭の回転があまりにも遅いた  
めテストでは毎回赤点、追試の常習犯である。

彼女が分厚い本を持っているのは、恐らく幸せそうに寝ている幸一  
郎の額をそれでぶつたいたからだろう。それを証拠に彼の額は赤  
くすりむいている。

「だからってそんなに重そうな本で叩かなくても…」

「幸一郎さんの部屋ってベンリな物いっぱいあるのね」

痛そうに顔をしかめて抗議する幸一郎に対して、山都はとても嬉しそうに（？）そう言い放つ。どうやらだいたい機械嫌が悪いようだ。

見兼ねた幸一郎はそんな山都を見つめるとにこつと笑って、

「そんな可愛い顔しないでくれよ、困ってしまうだろう。それとも山都ちゃんは私を困らせたいのかな？」

「……!!!」

みるみるうちに山都の顔は赤く染まり、拳をふるふると震わせながら叫んで部屋から出て行った。

「この最低エロガッパ!!!」

そうである。

功刀幸一郎20才、彼は何を隠そう女好きなのだ。

お茶目な性格で、女性に関わる事ならなんにでも首をつっこんでは問題を起こし、その度山都に迷惑をかけている。真つ黒な髪で、今日はスーツ姿だが毎日こころとファッションは変わる。オシャレが好きらしい。また、その男にしてはかわいらしく綺麗に整ったいわゆる‘美少年’的な顔立ちもたすけて、彼に悩みを打ち明ける女性（主に女子高生）が増えていた。

そんな幸一郎は当然のごとく彼女らの悩みを聞く。そしてその悩みがきれいさっぱり解決された時、幸一郎は『報酬』を貰うのだ。

しかし、『報酬』と云ってもお金ではない。第一この男の事だ、女性からお金などもらおうなどと思うわけがない。

それは、物であつたりお茶したりなど、まあ相手の女性によって毎回異なる。お金をもらうよりこちらの方が嬉しいのだろう。

その『報酬』は、たまに山都のもとへといく事がある。

山都は幸一郎の家で住み込みのバイトをするために、“大学行ったら自立しなきゃなんだから、そろそろバイトして一人暮らし始めるわ”とかいう口実で家を出たのだ。家族には、ここに一人で住むか

らと幸一郎の住所を渡して。  
やる事はないが一応バイトをしているのだ。ご褒美が欲しい。だから『報酬』ももらう権利があるのである。

「…あ」

土曜日なので久しぶりに廊下の窓を拭いていた山都は、この家に入ろうとしている一人の女性を見つけた。  
さらさらの黒いロングヘアが風で踊っている。

（年は…幸一郎さんより年上かしら？）

「幸一郎さあーん、お客様よー！」

山都の声が廊下中に響きわたる。じきに、はーいと嬉しそうな返事が聞こえた。

幸一郎の家には二階はないが、だいぶ広い。五目状につながる廊下の壁には、価値があるのかどうかもよく分からない絵画が所々に掛けられている。幸一郎の部屋は、玄関から向かって正面の、廊下の突きあたりに位置している。山都の部屋は、その斜め右手前である。山都は

「なんでこんなに無駄に広いのよこの家」  
だとか

「玄関まで行くの時間かかるじゃない」

だとかぶちぶち独り言を言いながら、急いで玄関へ向かった。  
たどり着きドアを笑顔でゆっくりと開けると、山都はその女性のあまりの美しさに息を呑んだ。

憂いを帯びた瞳。遠くから見たら気付かなかったが、彼女の目は綺麗な金色をしていた。

吸い込まれそうになる位。

おもわずぼーっと見とれていたが、はっとして笑顔をつくり、  
「ようこそ、中へどうぞ」

「……」

女性は山都を一瞥すると、何か言うでもなく一人ですんずんと中へ入っていった。

「あ……?! あっあの、幸一郎さんの部屋はつきあたりですよ」  
慌ててついていく山都。なんだか二人の立場が逆転している。

お客様なのに……と少し不満を抱いている自分に山都は嫌気がさした。

幸一郎はきれいで大きい机のゆったりとした椅子に座って、窓の向こうを見ていた。

(今日はどんな相談かな)

そう楽しみにしていると、部屋のドアが勢いよく開いた。

「いらつしゃい、はじめまして。私は功刀幸一郎と申し……」  
バンッ!!

セリフを言い終わらないうちに、女性は両手を机にたたきつけぎりと幸一郎を睨んだ。

それでもなお、彼女はため息が出るくらい美しい。

「あちらは使用人の山都ちゃん」

にこにこ紹介を続ける幸一郎の胸倉を、その女性は鋭い目付きのままぐいっとなつかんでひきよせた。

あっ、と声をもらす山都。幸一郎は、何か不敵な笑みを浮かべて目の前の女性をみつめている。

金色の瞳と子供の様な瞳が交錯して四秒、

「貴女の名前は？」

懲りずに笑顔で女性に問う。

女性はため息をつく、手を離して俯いた。

「…皆川美由…」

初めて聞いたその声はとてもか細く、か弱かった。

「皆川さんさ、どーしてそんなに怒っているのかな？私何かしたかね」

優しくなだめる様に美由にかけた言葉。

彼女の頬を伝っているものに気付いていた。

「…たすけて、下さい」



## 第1話・・・目（後書き）

お読みいただきありがとうございます！佐藤ビー玉です。拙い文章ですが、どうぞよろしく願います。ていうか早くも主人公の性格の悪さがうかがえますね。佐藤ビー玉でした。

## 第2話・・・心

皆川美由が去って行った静かな部屋。

幸一郎と、山都しかない静かな部屋。

幸一郎は、美由に何も言わなかった。

言えなかった。

ただ、明日も来るようにと山都が言ったただけだった。  
空白のころ。

美由が悩みの内容を話し始めたのは、今から五十分ほど前のことだった。

その金色の目に、綺麗な涙を浮かべながら。

見ていると悲しくなってしまうような、表情で。

美由の父親は、昔から病弱だった。そのため彼女の母親が職に就いており、ごく普通の収入で三人寄り添うように生活していた。もちろん美由もお金を求めた。生まれながらの美しい容姿とスタイルが、雑誌のモデルになる事を可能にした。当然と言うべきなのだろう。とても豊かとは言えないが、美由は家族と共有する時間を大切に思っていた。

父親が入退院を繰り返すことも、別に美由と母親にとって苦ではなかったのだ。

それなのに。

父親は自殺した。

病室の窓から飛び下り、真っ赤な血をまるで花のように飛び散らせた。

震える足で母親と病院にかけつけ、その跡を見た時、美由は現実を受け入れるほかなかった。

本当は、病室で弱々しく笑いかける父親の姿を期待していたんだ。美由の頭を優しくなでしてくれる、大好きな父親の姿を、夢見るように。

馬鹿だな、と思った。

期待すればするだけ、真実を知った時傷つくのに、馬鹿だなと思った。

それが分かっているけど、期待するのを止められなかった自分は愚かな人間だ。

そして、美由は涙がでない事に気付いた。

でない。

どうして？

こんなにも、つらくて悲しくて潰れちゃいそうなのに。

…ああ、そっか。

心がからっぽになっちゃったから。

もう何も知りたくない。

何も。

こんな自分を、どうしたらいいの？

「…幸一郎さん」

ベッドに横になり、どこか虚ろな目で天井を見ている幸一郎には、いつものふざけた調子を感じられない。山都はそんな幸一郎に、同

じく虚ろな表情でその名を呼んだ。

「何かなー…」

「呼んでみただけ。…何でもない」

「そう」

お互いどちらも目を合わせようとはしなかった。

きっと、嫌われてしまうから。

「ねえ、幸一郎さん」

「…んー」

「ごめんなさい」

残酷なまでに暖かい太陽。  
ただそれだけ。

### 第3話・・・手

「な、何やってんのよ...」

次の日の昼過ぎ、幸一郎のために紅茶をいれ彼の部屋に入った山都。幸一郎は眼鏡をかけ、何やら古い本を読んでいた。

真っ白なカッターシャツに黒いサスペンダーをつけ、七分丈の黒パンツ。大の大人の格好にしては少し子どもっぽいか...元々幼い顔付きなのではあるが。

「うん、ちよつとね。心理学の勉強でも」

ぱたんと本を閉じてから眼鏡を外し、大きく伸びをする。

「ふむ。...ありがとう、お茶」

にこりと笑いかける幸一郎に、ああ、と山都は持っていたお盆をデスクにおいた。

山都が紅茶の入ったカップを幸一郎の前に置くのと、幸一郎が山都の手を握るのは同時だった。

こぼれそうになり、山都は慌ててもう一つの手でカップをおさえる。しかしそれより意識がいくのは、今握られている自分の左手。

きれいで、柔らかくて、温かくて、初めて握った幸一郎の手はとても。

（気持ちいいな）

ぼんやりとそう考えている自分に気がついて、ぶんぶん頭を振った。

「こ、幸一郎さん...てて手」

顔がほてって声が震えているのが嫌でも分かる。

「山都ちゃんさー...今、ものすごく緊張してるでしょ...?」

信じられないくらい色っぽい声で尋ねられ、山都はもう何が何だか分からなくなった。

「皆川さんも、これくらい分かりやすい反応してくれたら助かるのになぁ」

「へあ?!」

思いがけない言葉に山都は変な声をだした。

幸一郎は無邪気な顔であはつと笑う。

「いやあ、さっき言っただろう? 心理学の勉強つて。ちょっと彼女の心に付け入ろうと思う。んでどうにかしてあの、何考えてるかさっぱり分からん表情から何か読み取ろうと…ほらあ皆川さんて、無表情が怒った顔しかしそうにないだろう。ね?」

いや、ね?と言われても。じゃあ早くその手を離してくれないか。

「それにしても、心理学はさっぱり分からない。私に洞察力がないのは分かっているが…あはは、なのになさっきのキミの心理はすぐよめたね」

だからその手を離せつて。

「ドキドキ、してたでしょ」

立ち上がつてずいっと顔を近づける幸一郎に、山都はまたもや焦つた。

(何考えてるのかさっぱり分からんのはあんなの方だろ!)

心の中でそう叫ぶものの、緊張で体が硬直して口に出すことができない。一方余裕しゃくしゃくの幸一郎は、くすりと笑って手を離し椅子に座り直した。

ほつと胸をなでおろす山都だが、すぐに真っ赤な顔のまま怒る。怒る。怒る。

「あーんーたーねー!! 女好きもたいがいにしときなさいよ! 女の人ときたら片っ端から声かけて…幸一郎さんは本気で好きになった人とかいないの?! 聞いてんのか! おい!」

美由が叩いたのと同じ様に、山都もデスクを両手ではこんと叩いた。少し自分のキャラを見失っている。

幸一郎は爽やかな笑顔で口説きをまだまだ続ける。

「でも嫌ではなかったんじゃないの?」

そうだ。嫌ではなかったのだ。

手を握られた時、自分の体は拒絶しなかった。

もしかすると、自分は幸一郎にかまって欲しいのかもしれないという考えまで浮かんできてしまう。

「そ…それは、そうだけど」

恥ずかしそうにごにごによと呟く山都を見て、幸一郎は。

(…可愛い)

赤らめた頬に手をのばす。

その時、

ガラランガラんと玄関が開く派手な音が聞こえた。

幸一郎はびくつとのばしかけていた手をひっこめる。

「皆川さん、来たんだ」

彼の手に気付かない山都は、そう言って玄関へと歩いて行った。

部屋に一人残った幸一郎は静かな声で、

「こっちは本気なんだけどなあ…」

微温い紅茶を喉に流し込んだ。

## 第4話・・・涙

分からない。

全く分からない、幸一郎の考えが。

山都は一人、台所で頭をかしげていた。

目の前には、白いカップと皿が三セットずつ並べてある。そしてその横にチーズケーキが三つ。

丁寧に皿にのせ、コーヒーのポットも一緒にお盆にのせる。

（本当、何考えてるんだろ）

美由が部屋に入ってきたとたん、ぱーっと幸一郎の表情が輝いた。そして立ち上がると、美由の白い手をぐいぐい引っ張って、

「さささ、どうぞこちらに」

と彼女を大きなソファアに座らせた。

自分も横に座るのを忘れない。

すると美由の肩に腕をまわしたものだから、山都はげんこつで幸一郎の頭を殴った。

幸一郎が女性をたらしこむ。山都がそれを止めにはいる。それがもう当たり前の様に行われる。

そして幸一郎は、冗談冗談、と笑って相談にのり始める。

いつもなら。

「痛あー！ちよつと何するんだい山都ちゃん…私は皆川さんに話があつてだね…そうだ！確かケーキあつたよね？持って来てよーケーキー」

「…は？」

そう言つて邪険に手を振る幸一郎の行動に、山都はア然とした。分からない。

全く分からない、幸一郎の考えが。



「ケーキとお茶です」

不機嫌そうな声でそう言いながら部屋に入ると、幸一郎は楽しそうに喋っていた。

ただし、美由は相変わらず無表情だが。

山都はお盆を、ソファの前のテーブルに置いた。

「よしっ山都ちゃん、今から皆川さんのお父上のお墓へ行こう」

美由がこくと頷く。

「はああああ?!」

もうだめだ。幸一郎が何をしたいのか予測できない。

「もう皆川さんとは話ついているのだよ。じゃあちよつと支度するから、玄関で待つてくれる?」

そう美由に言くと、素直にまた頷き部屋を出ていった。

「…あのさあ幸一郎さん?お墓つて、無関係のあたし達が参っちゃったりしていいの?」

「ああ、それは大丈夫さ、私たちがついていくのは途中までだから」

「そ、そうなの?」

「うん。ていうか正直キミが今の質問してくるとは思わなかった」

「どーという意味よ」

幸一郎と美由が並んで歩く後ろに、山都がついていく。

客と幸一郎はよく出かけるが、山都も一緒に行く事はあまりない。

数少ない外出の時、いつも二人の後ろを歩くのが習慣になっていた。二人が仲良く並んで歩く事になど、別に怒ったりしない。だってこれは立派なお仕事だから。

かといって幸一郎が客に手を出すのは許せない山都だった。

一時間半後。

「遠っ！皆川さん、お墓つて一体どこにあるのだ?!」

「あと、ものの三十分くらいで着くと思います」

「もののつて…結構あるよ…」

「すいません」

「いや別に謝らなくても」

大通りを曲がり、やや登り坂の脇道を進んでいく。周りには木が生い茂り、脇道は日陰になっていた。

「この上です」

美由が指を指した先にはかなり長い階段。

やがて階段の終わりには、墓地がひろがっているだろう。

「まじ?」

あからさまにイヤそうな顔をした幸一郎を睨みつける山都。

「結構いるんだな、人」

階段を下りてくる人が五人、上っていく人が三人。上にもまだまだいるようだ。

美由は無表情のまま見上げている。

幸一郎はそんな様子をちらりと見ると、

「はーっ、疲れた！二時間近く歩いたんだからな。私も歳をとったかな」

苦笑いしながら言う。

不思議そうに幸一郎を見てくる山都と美由。

「歳って、まだ二十歳じゃない。あたしと二つしか変わらないわよ」

「二つは大きいだろう」

そう即答すると、今度は美由の方へ向き直った。

「そんな訳でさ、皆川さん、先に行っててくれないかい？私たちも

ちょっと休んだらすぐに行くから」

「…え」

思いがけない言葉だったのだろう、美由はかなり驚いている。  
(途中までついていくつてのは、この事だったのかな?)

確信は持てないものの、山都は幸一郎の言葉を思いだし少しずつ気が付いてきた。

「でも…一緒に来てくれるって…」

「うん、一緒に来たじゃないか。ちょっと遅れるだけだよ」

心配そうな美由の顔に手を添えると、優しい笑顔でそう言った。

美由は何も言わずに、長い階段を上っていった。

「さてと。帰ろうか、山都ちゃん」

美由が階段を上りきり完全に見えなくなった時、幸一郎は口を開いた。

「え? 帰るって…皆川さんは?」

当然のような質問に、当然のように答える。

「彼女はもう一人で大丈夫だよ」

そう言くと、さっさと歩き出してしまった。

びっくりして幸一郎の後を追いつける山都は、まだよく分かっていない。

「え、何? 大丈夫って、何が?」

幸一郎はゆっくりと歩いている。

「彼女、まだ一回も墓参りしてなかったんだって。いつもあの階段の下で止まっちゃうんだって。だから私が一緒に行くから大丈夫だよって、安心させといたのさ。安心感つてのは案外続くものなんだよ。だから私が一緒に階段を上らなくても、後から来るんだし大丈夫だよ。だから私がお父上のお墓まで行くきっかけをつくったって訳だよ。それで彼女には十分だろ?」

嬉しそうに話す幸一郎を見て、山都は思った。  
なるほど。

だからわざと気のあるそぶりを大袈裟にして、  
相手を信頼させたの  
か。

まったくこの男は…。

幸一郎はにこりと笑って言った。

「大丈夫！」

美由は、緊張しながら父親の墓まで歩いていた。

上まで上ったのは初めてだ。

父親の墓の場所なんて、今まで目が腐るほど確認してきた。

行動に移すことができなかったのは、自分のぽっかり空いた心のせ  
い。

気がつくと墓が目の前にあった。

会いたかったよ。

あの時、泣きたかったよ。

今は目がかすんでよく見えないや…

お父さん。

お父さん。

「…おとうさん…」

次の日。

皆川美由はやってきた。

手に大きな花束を抱えて。

「わぁ、きれいな花だな。まるで貴女の様だよ」

二人とも、色とりどりの花たちをうつとりとして見ている。

「ありがとうございます、こんなに素敵な花束」

美由は、それはそれは綺麗な顔でくすつと笑った。

「報酬はその笑顔かな」にっこりと笑いかえす幸一郎は、そんな事を言った。

美由は初めて顔を赤くして、やはり笑う。

そして皆川美由は去っていった。

心に、いつばいつめこんで。

## 第5話・・・朱い。

ほんとうに、ほしいもの。

ぜったいに、まもれるもの。

ぐうぜん、ひつぜん。

せつな、えいごう。

よく、わかんないや。

あたしは。

ジリリリ、と目覚まし時計が鳴り響いた。

空はまだうすら青くて、なんという種類だったか、鳥たちが歌いながら空を抱いている。

起きるのにはまだまだ早い時間だ。今日は火曜日で、特に予定は何もないはずなのに。

幸一郎はセットした覚えもない目覚まし時計を、振り下ろした右手で止めた。ばご、という音がした。

しかし最新の時計はよくできている。音を止めても何分後かにまた鳴り出すのだ。完全に停止させるには‘もと’から切らなければならぬ。幸一郎はそれを知っているから、音を止めた後寝ぼけ眼でなんとか時計をつかみ、‘もと’を切った。

（なんで、こんな時間に鳴るんだよ…）

ううー、と唸るとまた布団の中にもぐり込む。現在AM5時。

「ほへええ」

意味が分からない変な声を出すと、まぶた瞼を閉じて幸せそうな顔で二度寝しようとしていた。

できなかった。

「あつれーっ。目覚まし時計確かに鳴ったのにい…なんで寝てんのよ、この怠け者！起きろー！」

「……？は？え？な、何何？」

やはりまだ寝ぼけている幸一郎は、いまいち状況をつかめていない。一人でわたたしていた。早朝から大声をあげた山都は少し怒っているようだ。

「あたしがセットしたのよ、これっ。どーせまたいつもみたいに、9時とかに合わせるつもりだったんでしょ？」

「えええー…今日何かあったっけ…？お客さん、入った？」

不機嫌そうに頭をかくのを見て、山都はにっこりと笑った。

「何も」

「…。じゃ、何で私を起こしたのかな、山都ちゃん」

「…正直に言ったら、幸一郎さん笑うもん」

ちよつとだけ悲しそうに見える山都は、それだけ言っただけで部屋を後にし学校へと歩いていった。

幸一郎はというと、しばらくきょとんとしていたが、また夢の中へと沈んでいった。

「遅くなるって…どーして？」

夕日が綺麗に見える時間、幸一郎は山都から携帯電話にかかってきた話を聞き、悲しそうな声で質問した。この家には携帯電話しかない。

『友達と晩ご飯食べに行くのよ、だから幸一郎さんは適当に何か食べなさい』

「いーけど、何時くらいになるのか決めときなさい」

『んん…8時くらい…』

「はいはい。気をつけてね」

はい、という元気な声がして電話が切れる。幸一郎は携帯電話をデスクに置く。すると、穏やかな表情がガラリと変わる。

「…男かな」

幸一郎は心配だった。あれほどの美人でスタイル抜群なくせに自覚なくて、あどけなくて人を疑わなくて恋愛沙汰に疎くて。

変な男に騙されてたら、とか、考えてしまうのだ。

「山都ちゃんに限って、そんな事ないよね」

「東海林さんに限って、そんな事ないよね？」

「え？」

そう遠くはない小さな公園のベンチで、山都は一人の少年と話していた。普段から人通りは少ないが、夕日で朱く染まった噴水の他に誰もいない。

水城悠太は山都のクラスメートだった。

チャラチャラした様子もなく、バスケットボールを袋に入れて持っている。どちらかといえば幸一郎の様な感じだが、悠太はそこまで童顔ではなかった。友人たちは彼をカッコいい、彼氏にしたいと言うが、山都は一度も興味を示したりはしなかった。というか、自分から関わりさえもしなかった。意図的ではない。別に意識などしていなかった。

それなのに悠太は山都がお気に入りだった。事あるごとに山都に近付き、話しかけ、一緒にいたがろうとした。そしてとうとう今日は山都を“デート”に誘ったのだ。もちろん山都にその気はない。

「ご、ごめん水城くん。何だったっけ？」

幸一郎の事を考えていた山都は、すっかり悠太の話聞きもらしてしまった。



ダメだな、と思った。友達の話はしっかり聞かなきゃいけないのに、私は何をしてるんだろう。

「だから俺の友達がさ、東海林さん誰かと付き合ってるって言うってたって話なんだけど」

山都は自分の話でちよつとびっくりした。こんな風にはつきりと言ってくるのは、幸一郎だけだったから。それだけになぜか可笑しくなり、笑ってしまった。

「んふふふ、そんな訳ないじゃない、あたしがそんなこ」  
かたん。

小さな音と共に、世界が傾いた。

「と…」

ボールが地面に落ちる。

気付いた時には、山都はベンチと悠太に挟まれ横になっていた。悠太は山都の両肩をつかんで何も言わない。

いくら鈍感な山都でも分かるほど、この状況は明らかに。

（押し倒、されてる？）

途端に顔中が熱くなる。身体が震える。

どうして。

「み、水城くんホラ、ご飯食べに行かないと…」

「ねえ、もう一つ質問していいか？…さっきはさあ、何を考えてたの？」

「やだ…」

顔を逸らす。力の限り悠太を押し返そうとするが、当然敵わない。

「答えないんだ。まあいいけどさ」

ニヤついたまま、悠太はお互いの距離を縮めていく。

山都の目に映るのは、真っ赤な空の色だった。

第5話・・・朱い。（後書き）

生意気キャラはもう要らないよ。幸一郎だけで勘弁しろよ。という  
声が聞こえてきそうだね！ちなみに私は朝食にはパン派です。では  
では佐藤ビー玉でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5871a/>

---

大好きだ！

2010年10月11日23時24分発行